２月２２日（日）サムエル記第一２３章６～１４節

「サウルは、毎日ダビデを追い続けたが、神はダビデをサウルの手に渡されなかった。」（14 節）

ダビデがケイラに攻め上ったことで、ダビデがそこにいることがサウルに知らされました。ダビデがケイラを攻めたことにより、サウルは神がダビデを自分の手に渡したと思いました。ですから「彼は扉とかんぬきのある町に入って、自分自身を閉じ込めてしまった」（７節）と言いました。これは、ケイラが城壁に囲まれた町なので、ダビデはその町の中に入ってペリシテを討つと、後からダビデを追って来たサウルと彼の家来たちからすれば、ダビデはどこにも逃げることのできない城壁の町の中に閉じ込められてしまったと思ったということです。

６節に「アヒメレクの子エブヤタルは、ケイラのダビデのもとに逃げて来たとき、エポデを携えていた」とありますので、９節で、そのエブヤタルに自分が携えて来たエポデを持って来るように言いました。そして、エポデを通して主に伺うと、サウルがケイラに下って来ること、そしてケイラの者たちはサウルにダビデを引き渡すことを告げました。

私たちもどうしていいか分からない時は、祈りとみことばによって主に尋ねましょう。生ける主は私たちの祈りに答えて、なすべきことを必ず教えてくださいます。ダビデは、主が示されたことを信じてケイラから出て、そこことさまよいましたが、ダビデがケイラから逃れたことがサウルに告げられると、サウル王は討伐をやめました。１４節を見ますと、サウルは毎日ダビデを追い続け、ダビデのさらなる逃避行は続きましたが、神はダビデをサウルの手に渡されませんでした。そのようにして主はダビデをサウルの手から守ってくださったのです。私たちも何が起こっても、主のみもとにいることよりも安全な場所はありません。常に主に身を避ける者でありたいと思わされます。

２月２３日（月）サムエル記第一２３章１５～１８節

「サウルの息子ヨナタンは、ホレシュのダビデのところに行って、神によってダビデを力づけた。」（１６節）

１４節で「ダビデは、荒野にある要害に宿ったり、ジフの荒野の山地に宿ったりした。」とあり、１５節でダビデは、サウルが自分のいのちを狙って戦いに出て来るのを見たとき、ジフの荒野のホレシュにいました。そこにいたダビデをヨナタンは、神によって力づけます。まず最初が「恐れることはありません」ということです。ダビデは、いのちを狙っているサウルと彼の家来たちがいつ自分に追いついて殺されるか分からない緊張を強いられていたでしょうし、サ

ウルに対する恐れはどれほど大きかっただろうかと思わされます。それは彼の精神的にも大きなダメージを与えたことでしょう。その中にあってヨナタンは「恐れることはありません」と信仰による励ましを与えています。次に「父サウルの手が、あなたの身に及ぶことはないからです。」と言います。これは、ヨナタンがダビデを励ますために何の根拠もなく、このようなことを言っているということではなく、むしろヨナタンもダビデのために祈る中で、サウルがダビデを捕えようとする試みは決してうまくいかないことを確信させられたのでしょう。

私たちもお互いにダビデとヨナタンのように神によって力づけるような交わりを教会の中で深めてまいりたいと思わされます。これはただ教会に集うことにより形成されていく交わりではなく、むしろ互いにそれぞれの置かれている状況を傾聴し、そして静かに主の御前で互いのために祈ることにより与えられる交わりです。根ほり葉ほり私たちが聞いて知ろうとしなくても主はご存じですから、すべてを知っておられる主にゆだねて祈ればよいのです。そして必要であれば、ヨナタンのように励ましの言葉をかけましょう。また夫婦で、親子で、家族の中でも神の御名によって互いに力づけることができたなら幸いです。そのような主にある交わりがなされているでしょうか。

２月２４日（火）サムエル記第一２３章１９～２９節

「サウルはダビデを追うのをやめて帰り、ペリシテ人の方に向かった。こういうわけで、この場所は「仕切りの岩山」と呼ばれた。」（２８節）

ジフ人たちが、サウルにダビデが自分たちのところに隠れていることを伝え、２０節では「私たちが彼を王の手に引き渡します。」とまで言います。このことはサウルを大いに喜ばせたことでしょう。ですから、「主の祝福があなたがたにあるように。あなたがたが私のことを思ってくれたからだ。」と言います。２２，２３節では、ダビデの隠れている場所の詳細な情報を求めます。そして「私はあなたがたと一緒に行く。」「彼を捜し出す。」（ともに２３節）とのサウルの言葉からも、何としてもダビデを見つけ出そうとするサウルの執念を伺い知ることができます。２４節で「一方、ダビデとその部下は、エシモンの南のアラバにあるマオンの荒野にいた。」とあり、今度はダビデに話題が移ります。サウルとその部下がダビデを捜しに出て行ったことがダビデに知らされましたが、むやみに動くよりも岩場に下り、マオンの荒野にとどまったほうが安全だと思ったのでしょう。サウルは、このことを聞き、マオンの荒野でダビデを追いました。サウルと彼の部下は間近に迫っていて、まさに山をはさんで、サウルとダビデが互いに進んでいるような状況でした。そして「サウルとその部下が、ダビデとその部下を捕えようと迫

った」まさに、その時にペリシテがイスラエルに攻め込んで来たことが知らされ、やむなくサウルはダビデを追うのをやめて帰り、ペリシテ人の方に向かいました。

主なる神様は、ペリシテ人を用いて、ダビデを絶体絶命の危機から救い出しました。神様は驚くような方法をもって私たちを救い出してくださいます。それにより危機をも益と変えてくださり、私たちにとっての危機的状況をご自分が働かれる機会とし、ご自身の力を表すためのみわざをなす時としてくださいます。神を信じない人たちからすれば、ペリシテ人がイスラエルに攻め込んできたことも偶然の産物と思うかもしれませんが、私たちには偶然はありません。すべてが主の導きです。どんな中でも主が働かれることを信じて、平安をもって主の助けを祈り求めましょう。

２月２５日（水）サムエル記第一２４章１～７節

「私が主に逆らって、主に油注がれた方、私の主君に対して、そのようなことをして手を下すなど、絶対にあり得ないことだ。彼は主に油注がれた方なのだから。」（６節）

サウルはペリシテ人を打ち払うと、彼らを追うのをやめて再びダビデを捜すために帰って来ました。サウルがダビデのもとを離れたのは一時的なもので、ちょうどその時にサウルにダビデがエン・ゲディの荒野にいますとの知らせが入りました。サウルは、ダビデのもとにいる６００人の五倍にあたる３０００人の、しかも精鋭部隊を選り抜いて、ダビデとその部下たちを捜しに出かけました。そして、羊の群れの囲い場の洞穴で用を足すために中に入りましたが、その洞穴の奥にはダビデと部下たちが座っていました。サウルしかいない状況を見て、ダビデの部下たちはサウルを討ち取る絶好の機会だと思ったことでしょう。４節で「今日こそ、主があなた様に、『見よ、わたしはあなたの敵をあなたの手に渡す。彼をあなたの良いと思うようにせよ』と言われた、その日です。」と言います。部下のこのことばは、聖書には出てまいりませんが、ダビデが否定していないところを見ると、主が何らかのかたちでダビデに告げたのかもしれません、それをダビデの部下たちは、ここでそれを適用したのです。部下たちのことばにも後押しされて、ダビデはサウルの上着の裾を、こっそり切り取りました。しかし「後になってダビデは、サウルの上着の裾を切り取ったことについて心を痛めた。」とあります。そもそも上着の裾を切り取るというのは、サウル王に対する反逆との意味がありました。もしダビデがサウルに対する意思表示をしたなら、それはサウルに油注がれた主に対する反逆を意味するとダビデは考えたのでしょう。どんな王であったとしても、サウルは確かに主によって油注がれた者であることは間違いないということです。そしてダビデは部下にもサウルに襲いかかること

を許しませんでした。

主が油注ぎをもって召されることの重さを私自身もいつも思わされています。小さいことではありますが、私はどんなに若い牧師であっても「〇〇先生」と呼ぶようにしています。そうすることで、主が油注がれた牧師に対して常に敬意を払うことを心がけています。主がみこころにより召すということがどれほど重い意味を持っているかを私たちも深くおぼえたいと思わされます。

２月２６日（木）サムエル記第一２４章８～１５節

「どうか、主が私とあなたの間をさばき、主が私のために、あなたに報いられますように。しかし、私はあなたを手にかけることはいたしません。」（１２節）

まずサウルが洞穴を出て道を歩いて行きました。（７節）その後、ダビデも洞穴から出て、サウルの後ろから「王よ」と呼びかけます。サウルが振り向くと、ダビデは地にひれ伏して、礼をすることで主に油注がれた者としてサウルに敬意を払います。実際には、サウルの殺意は彼のダビデに対するねたみから出ていたのですが、決してサウルを責めるようなことを言わず、自分がサウルに害を加えようとしていると言っている者の言葉に、なぜ耳を傾けるのかと言います。１０節からダビデは洞穴でのことをサウルに告げます。主は間違いなくダビデの手にサウルを渡されました。もしダビデがサウルを殺そうと思うなら、それができましたが、ダビデはそうはせず、ただ上着の裾を切り取っただけでした、なぜなら、サウルは主によって油注がれた者だと信じていたからです。そのサウルの命をとらないで上着の裾だけを切り取ったことがらもダビデのうちに悪も背きのないことの証しだと言うわけです。そのようにダビデはサウルに何の罪を犯してもいないのに、いのちを狙われていると訴えます。そしてサウルにとってダビデは死んだ犬か一匹の蚤のような者なのに、なぜ後を追い回していのちを狙おうとするのか、それには何の意味もないとダビデは言おうとしているのです。（１４節）そしてダビデは、「どうか、主が私とあなたの間をさばき、主が私のために、あなたに報いられますように。」（１２節）「どうか主が、さばき人となって私とあなたの間をさばき、私の訴えを取り上げて擁護し、正しいさばきであなたの手から私を救ってくださいますように。」（１５節）と二回、主がサウルとダビデの問題をさばいてくださるようにと言います。なぜなら主はすべてをご存知であり、主はすべてを正しくさばかれるお方であると信じていたからです。そして仮にダビデ自身が油注がれた王であるサウルに手をかけて殺さなくとも、主がみこころのままにサウルにふさわしいことをなされるとダビデは信じていたのです。

私たちも、対人関係の問題において自分で何とかしようとしてしまいますが、すべてをご存知で、みこころのままに物事を行ってくださる主にすべてをゆだねましょう。その時に大切なことは、私たちの側で責められるところがないかということです。もし自分にも問題があると気がつかされたなら、主の御前に悔い改めましょう。

２月２７日（金）サムエル記第一２４章１６～２２節

「おまえは私より正しい。私に良くしてくれたのに、私はおまえに悪い仕打ちをした」（１７節）

ダビデがサウルに対して語り終えると、サウルは「これはおまえの声なのか、わが子ダビデよ」と言い、サウルは声をあげて泣きました。ここでサウルがなぜ泣いたのかということについては、さまざまな説明がなされていますが、おそらく感情が高ぶり思わず泣いてしまったのではないかと思われます。しかし決して自分がしたことに対するサウルの悔い改めの涙とまでは言えないでしょう。１７節で「おまえは私より正しい」と言います。ダビデが自分に良くしてくれたことについては認めざるをえず、それに対して自分が悪い仕打ちをもって報いたことについては、客観的に見てもダビデのほうが正しいということになることをサウルも認めざるを得ませんでした。これまでダビデはさまざまなかたちでサウルに良いことをしてきましたが、主がダビデの手にサウルを渡したにもかかわらず、サウルを殺さなかったことを通して、ダビデは、誰も否定できないかたちで、ダビデには何の罪も落ち度もないことを示されたということです。特に１９節でサウルは自分とダビデが敵対していたことを認め、敵である自分を無傷で去らせたことについて、ダビデは自分に良いことをしてくれたと認めざるをえなかったのです。そして恐らくサウルは何らかのかたちで、次の王がダビデであることを知っていたのでしょう。そしてサウルもダビデが次の王であることを認めました。そしてダビデが王となった後に、自分の子孫を断たず、自分の名を父の家から消し去らないことをダビデに誓わせ、ダビデもサウルにそのことを誓いました。

私たちの周りには敵とまでは言えなくとも、私たちのことを快く思わない人や中傷したり、陰口を言う人もあるでしょう。そのような人たちに対して私たちはどのような態度を取っているでしょうか。すべての人に主にあって良くするなら、必ずいつの日にか「おまえは私より正しい」と言われる日が来るはずです。その時を主が与えてくださることを信じ、すべての人に善を行うべきです。ローマ人への手紙１２章１９～２１節を読みましょう。もし私たちが人に報復したり、復讐したりするなら、それは悪に負けることになります。神のさばきにすべてをゆだねることが私たちにとっての最高の善です。

２月２８日（土）サムエル記第一２５章１～１２節

「ダビデとは何者だ。エッサイの子とは何者だ。このごろは、主人のところから脱走する家来が多くなっている。」（１０節）

１９章１８節で難を逃れたダビデはラマのサムエルのところへ行きました。その後は聖書には何の情報もなく、突然短く１節に「サムエルは死んだ」と記されています。預言者として人々から尊敬されていたサムエルのために全イスラエルが集まって彼のために悼み悲しみ、ラマにある彼の家に葬りました。ダビデは、サムエルという後ろ盾を失い、南へ向かいパランの荒野に下って行きました。

２節からは、突然マオンに舞台が変わります。そこに住んでいたナバルという人がカルメルを拠点に事業をしていて非常に裕福で、羊三千匹とやぎ千匹を持っていました。そして妻はアビガイルで「この女は賢明で姿が美しかったが、夫は頑迷で行状が悪かった」と二人が対象的な性格であったことが分かります。

「彼はカルメルで羊の毛の刈り取りをしていた」（２節）とありますが、４節でダビデはナバルがその羊の毛を刈っていることを聞き（５節）十人の若者を遣わし、まずダビデの名で安否を尋ねさせ、ナバルが所有する羊の羊飼いたちを守ったりして、よくしてやったことを告げます。（７，８節；１５，１６節参照）そうして何か手元にあるものをもらえるようにと願います。（８節）ところが１０節で「ダビデとは何者だ。エッサイの子とは何者だ」と言います。これはダビデのことを知らなかったということではなく、侮辱しているのです。そして何か食糧を求めるダビデに対しては「私のパンと水、それに羊の毛を刈り取る者たちのために屠った肉を取って、どこから来たかも分からない者どもにくれてやらなければならないのか。」と言い、何も与えようとはしませんでした。なぜナバルは、そのような態度を取ったのでしょうか。それは彼が裕福だったからです。裕福さが彼を傲慢にし、食料を乞うダビデを侮辱し、使いに出された若者たちを何も持たせないで帰すようなことをしたのでしょう。

裕福は人を傲慢にし、人をますます貪欲にさせます。私たちが豊かに与えられている時にこそ謙遜になり、必要とされているところに与えられている富を賢く用いることのできる者とさせていただきましょう。